

日本語表現文型

中 級 II

筑波大学日本語教育研究会

日本語表現文型

中 級 II



筑波大学日本語教育研究会

日本語表現文型 中級Ⅱ

1983年4月1日 初版発行

1998年2月20日 発行

編 著 筑波大学日本語教育研究会
代表 寺村秀夫

発 行 株式会社 イセブ 出版部
印 刷 つくば市天久保2-11-20
TEL 0298-51-2515

発売元 (株) 凡人社
東京都千代田区平河町1-3-13
菱進平河町ビル8F
TEL 東京03(3263)3959

不許複製

は し が き

本書は、日本の大学あるいは大学院に留学する一般外国人留学生を対象とした中級程度の教科書である。

「初級」と「中級」のさかい目をどこに置くかについては、いろいろな考え方があり得る。ここではごく大まかに、現在多く市販されている初級用の教科書ないし参考書を一応終えたあたり、というふうに考える。学習時間数でいえば、ほぼ300時間程度の教室学習時間を経たものというてよかろうか。週20時間前後の短期集中コースで半年、週10時間程度なら一年ぐらい、というのが平均的な目安であろう。

初級を上のように考えたとき、それを一応終えて大学あるいは大学院に入った学生が、それぞれの専門の勉強を、他の日本人学生と同じようにやっていこうとすると、なおかなりの日本語力の不足を感じるはずである。かといって、専門書や新聞や小説などを、辞書をたよりにただがむしゃらに読んでいくというのも、いかにも非能率的であろう。本書はそういう学生が、専門の勉強をすこしずつ始めるのと並行して、約一年で一般的な表現の類型を能率よく身につけていくための助けとなることを意図して作成したものである。

「表現文型」というのは、言ってみれば「構造文型」に対するものである。学生用の現行の初級用教科書は、文の構造を単純から複雑に整理して並べ、それを骨組みにして作られたものがほとんどである。本書は、学生がそういう初級の課程で与えられる文法的知識、たとえば各種の助詞の機能とか、用言の活用形や補助形式の用法とかを、一応習得していることを前提としている。その上で、学生が一般的に日本の大学で要求される理解・表現の型をとり出し、それぞれの特徴について考え、実際に応用できる力を養うことを目標とした。

昭和57年3月に、それまで各教官がプリントの形で配布、使用していたものを集め、「試作版」(2冊)として出した。本書は、57年度の一年間、それを中級全クラスで使用しながら、教官が共同討議をくり返し、その結果をまとめたものである。

表現類型、つまり各課の順序は、必ずしも易から難へ、という順序にはなっていない。しかし、各課の中では、大体やさしいものから難しいものへと並べてある。はじめはやさしい話しことば次に日常的な対話、最後に書きことば的表現、というふうになっている。書きことば的表現の中には、なまの文章にかなり近いものもときには入れてある。

本書は、教室授業か否かは別として、一応指導者の存在を前提としている。指導者は、初級の場合と同様、できるだけ最初は直接口頭で(つまり初めから「読本」として本書を使うのではなく)、各課の表現文型を学生に理解させ、多少の練習もしてから、本文を“読む”作業にかかっ

てもらうほうがよいと思う。一課ずつ進めていくか、適当な順にとり上げていくか、あるいは、まず各課のやさしい部分をひととおり終りまでやってから、読解的にまた初めに戻るか、等々は、全くそれぞれの学習環境、目的によって教授者に判断してもらうのがよいと思う。

「表現文型」については、まだこれというきまった型や数はないといってよいと思う。本書でも、なおつけ加えたいと思う類型がいくつかあったが、今回はこれで一応出すことにした。利用者の率直な批判、示唆を期待している。

1983年3月

筑波大学日本語教育研究室

代表 寺 村 秀 夫

共同執筆者

寺 村 秀 夫 (文芸言語学系)

野 口 崇 子 (非常勤)

草 薙 裕 (文芸言語学系)

田 中 都紀代 (非常勤)

堀 口 純 子 (文芸言語学系)

加 納 千恵子 (非常勤)

佐久間 まゆみ (文芸言語学系)

藤 田 正 春 (教育学研究科院生)

綾 部 裕 子 (現代語現代文化学系)

大 前 典 子 (非常勤)

目 次

12	類似・比況・比喻	1
13	比較	19
14	程度	35
15	対比	49
16	伝聞	61
17	予想・予感・徴候	89
18	予想・期待の実現と非実現	123
19	原因・理由 (I)	143
20	原因・理由 (II)	173
21	逆接	207

1

キラキラ光る宝石のような目，ギラギラしている炎の目
深い湖のように静かな目，刃のごとく鋭い目
氷のように冷たい目，春の海を思わせるのどかな目
夏の陽ざしのような明るい目
あなたの目は何にたとえたらいいでしょう。

2

子供は親に似ている場合もあれば，似ていない場合もあります。「カエルの子はカエル」「トンビがタカを生んだ」というのはどちらもこの事を比喻的にのべた表現です。前者は子も親同様凡人であることの，後者は子のほうが優れていることのたとえです。

3

日本社会の家族的構成ということがよく言われる。これには，社会全体，あるいはその中の種々の集団を運命共同体として家族になぞらえて考える場合と，社会における人間関係を親－子

一孫，兄一弟などのような血縁関係に擬して考える場合の両方があるように思われる。

4

- A 「中島さんと寺田さんはよく似ているね。顔だけじゃなく
体つきも声もそっくりだから，びっくりするよ。」
- B 「そうですね。ウリ二つでしょう。」
- A 「あんまり似ているんで，時々二人をまちがえるんだ。」
- B 「あの二人は双子なんだけど，中島さんのお姉さんが結婚
して寺田さんになったのよ。」
- A 「ああ，そうか。」

5

- A 「朝刊にヒトの遺伝子をネズミに移しかえる実験に許可が
下りたって出てたわよ。」
- B 「ふうん。まるで人間が創造主にとって代ろうとしている
みたいだね。」
- A 「あなたそっくりの顔をしたネズミがネズミ捕りにかかっ
てたら，どうする？」

B 「これだから素人は困るんだよ。」
しろうと

6

妻 「『グレシャムの法則』って知ってる？」

夫 「『悪貨は良貨を駆逐する』っていうのだろ。例えば、質の悪い百円玉と質の良い百円玉が同時に流通していると、良い方はしまいこまれたりして、悪い方だけが流通するようになることだよ。」

妻 「それじゃあ、私がだんだん寝坊でもの覚えが悪くなったのも、これにあてはまるわね。」

夫 「うるさい。」

7

ボー、ボー。船は汽てきを鳴らしながら、しだいに速力をおとす。港内に入ったのだ。貨物船や漁船がたくさん集まって、ゆったりと休んでいる。

牛が伏せたような形の函館山はとだてが落ち着いたすがたを見せている。函館山のふもとから、ゆるやかな傾斜を見せて、函館の町が連なっている。町は港をいあくように、おうぎ形に広がって

いる緑の山と、白い建物。すばらしい美しいながめだ。なんだか遠い外国の港にでも着いたような気分になる。

8

「光陰矢の如し」とは、よく言ったものである。この十年は、あたかも弓をはなれた矢の如く、あっという間にすぎ去ってしまった。

退職、妻との死別、一人娘の結婚、孫の誕生・・・私の人生で少なからぬ意味を持っていたはずのこれらの出来事も、十年という歲月の中でとらえてみると、夏の夜空に流れる彗星すいせいのように、一瞬のうちに消え去った出来事であったような気がする。そして私は、この十年間まるで夢をみていたかのように感じるのである。

9

朝起きると、人々はまずその日の朝刊に目を通す。また、夕方になると、今度は夕刊を開く。人々はどうしてこんなに新聞を読むのであろうか。それは、世の中の動きや社会に起こった出来事を早く知ったり、確めたりしたいからである。今日では、

公的な生活はいうまでもなく、私的な生活でも社会をはなれては成り立たない。新聞は、いわば、この社会の動きを写し出す鏡のようなものである。だから、人々は、これをのぞかないではいられないのである。

10

日常用いているありふれた言葉が、ちょっと組み合わせをかえたりしただけで、突然すごい力を持った言葉に変貌する。そこにこそ言葉というものをを用いることの不思議さ、恐ろしささえある。なぜそういうことが生じるのだろうか。結局のところ、我々が使っている言葉は氷山の一角だということである。氷山の海面下に沈んでいる部分は何か。それはその言葉を発した人の心にほかならず、またその心が同じく言葉の海面下の部分で伝わり合う他人の心にほかならない。

（大岡 信，「言葉の力」より）

【語句】

- | | | |
|----------|--------------|---|
| 1. 宝石 | ほうせき | |
| 炎 | ほのお | |
| 刃 | やいば | |
| …を思わせる | おも（わせる） | それを見ると…を思い出すような |
| 陽ざし | ひ（ざし） | 太陽の光線 |
| たとえる | | あることを説明するために、それに似た
ことを例として出す。名詞形は「たとえ」 |
| 2. 親 | おや | |
| 場合 | ばあい | |
| 比喩的に | ひゆてき（に） | たとえとして |
| 表現 | ひょうげん | 言い方 |
| 前者 | ぜんしゃ | 二つの事を並べていう時、前にのべたこ
と・もの |
| 後者 | こうしゃ | |
| 親同様 | おやどうよう | 親と同じに |
| 凡人 | ぼんじん | ふつうの人 |
| 優れている | すぐ（れている） | より良い |
| 3. 家族的構成 | かぞくてきこうせい | |
| 種々の集団 | しゅじゅ（の）しゅうだん | 人のいろいろなあつまり |
| 運命共同体 | うんめいきょうどうたい | 同じ運命をもつ人々のあつまり |
| なぞらえて | | 同じようなものとして |
| 人間関係 | にんげんかんけい | |
| 孫 | まご | 子どもの子ども |
| 血縁関係 | けつえんかんけい | 血のつながりのある関係 |
| 擬して | ぎ（して） | かりにあてはめて |
| 擬声語 | 擬態語 | |

- | | | |
|---------|---------------------|-----------------------------|
| 4. 体つき | からだ (つき) | 体のかっこう |
| そっくり | | よく似ていること |
| ウリ二つ | | 全く同じようによく似ていること |
| 双子 | ふたご | 一回の出産で同時に生まれた二人の子 |
| 三つ子 | み (つ) ご | |
| 五つ子 | いつ (つ) ご | |
| 5. 朝刊 | ちょうかん | 朝の新聞 |
| 夕刊 | ゆうかん | |
| 遺伝子 | いでんし | 生物の形・性質を親から子につたえる物質 |
| 移しかえる | うつ (しかえる) | |
| | XをYに移しかえる | |
| 実験 | じっけん | |
| 許可が下りる | きょか (が) お (りる) | ゆるしがでる |
| 創造主 | そうぞうしゅ | すべてをつくり出した存在 |
| とって代る | (とって) かわ (る) | かわりをつとめる |
| ネズミ捕り | (ネズミ) と (り) | ネズミをつかまえる道具 |
| 素人 | しろうと | 専門家でない人 |
| 玄人 | くろうと | 専門家 |
| 6. 法則 | ほうそく | いろいろな現象の中に見られる、常に変らない関係・きまり |
| 悪貨 | あっか | 質の悪い硬貨 |
| 良貨 | りょうか | |
| 駆逐する | くちく (する) | 追いはらう |
| 流通する | りゅうつう (する) | 使われる、通用する |
| 寝坊 | ねぼう | 朝おそくまで起きないこと (人) |
| もの覚えが悪い | (もの) おぼ (えが) わる (い) | |
| あてはまる | | 同じようなことである |

- | | | |
|------------|---------------|--------------------------|
| 7. 汽てき | き（てき） | 船がならすポーッという音 |
| しだいに | | 少しずつゆっくり |
| 速力 | そくりょく | |
| 港内 | こうない | みなとの中 |
| 貨物船 | かもつせん | にもつをはこぶ船 |
| 客船 | きゃくせん | |
| 漁船 | ぎょせん | 魚をとる船 |
| ゆったりと | | ゆっくりと、のんびりと |
| 伏せる | ふ（せる） | うつ伏せになり、低い姿勢をとる |
| ゆるやかな傾斜 | （ゆるやかな）けいしゃ | ほんのすこしななめになっていること |
| 連なる | つら（なる） | 続く |
| いだく | | 「だく」の文語的表現。夢（希望、うらみ）をいだく |
| おうぎ形 | （おうぎ）がた | せんすの形 |
| 気分 | きぶん | 気持 |
| 8. 光陰矢の如し | こういんや（の）ごと（し） | 月日のたつのは矢のようにはやい |
| よく言ったものである | | ちょうどぴったりの表現だ |
| あたかも～の如く | | まるで～のように |
| すぎ去る | （すぎ）さる | すぎてしまう |
| 退職 | たいしょく | 仕事をやめて職場を去ること |
| 退学 | たいがく | |
| 退院 | たいいん | |
| 死別 | しべつ | 死に別れること |
| 生別 | せいべつ | |
| 誕生 | たんじょう | 生まれること |
| 少なからぬ | すく（なからぬ） | 少しではない、大きな |
| 出来事 | できごと | |
| 歳月 | さいげつ | 年月 |
| とらえてみる | | 考えてみる |

彗星	すいせい	突然あらわれ、しばらくすると又消える 長い尾をひいた星
流星	りゅうせい	
惑星	わくせい	
恒星	こうせい	
一瞬のうち	いっしゅん（のうち）	一回まばたきする短い間に
夢	ゆめ	
9. まず		最初に
目を通す	め（を）とお（す）	さっと読む
確める	たしか（める）	はっきりさせる
公的	こうてき	個人的でない
私的	してき	
のぞく		読んでみる
10. 日常	にちじょう	毎日ふつうに
用いる	もち（いる）	使う
ありふれた		どこにでもある
突然	とつぜん	きゅうに
変貌する	へんぼう（する）	かわる
不思議さ	ふしぎ（さ）	わけがわからない
恐ろしさ	おそ（ろしさ）	こわいこと
生じる	しょう（じる）	起こる
結局	けっきょく	つきつめて考えると
氷山の一角	ひょうざん（の）いっかく	氷山の海面から上に出た部分。表面に出ていることよりもかくれて見えない部分のほうが大きいことのたとえ
海面下	かいめんか	
言葉を発する	ことば（を）はっ（する）	言う
ほかならず		～にちがいない

【文型・文法】 類似，比況，比喻

- I. まり子は母親によく似ている。
 太郎と次郎はよく似ている。
 三郎は母親似だ。

(注) 「XはYに(と)似ている」という時はX→Yという方向で似ていることを示す。
 「に」と「と」では「に」の方が方向性が強い。「XとYは似ている」というときは
 X⇄Yで互いに似ていることを示す。

- ① 子供はたいてい親に似ている。
- ② 森君のきょうだいはみな声がよく似ている。
- ③ 中島さんと寺田さんは顔も身体つきもよく似ている。
- ④ あなたはあまり御両親に似ていらっしゃいませんね。
- ⑤ 車がガソリンで走るのは，人間が食物をたべて活動するのと似ている。
- ⑥ うちの娘はどこからどこまで父親似です。

- II. このカバンは僕のとそっくりだ。
 中島さんは双子のお姉さんとウリ二つです。

(注) 「そっくり」は人にも物にも使えるが，「ウリ二つ」は人の顔が非常によく似ている
 ことを言う。

- ① 中島さんはお姉さんと目つきがそっくりです。
- ② あなたと私は食べ物の好き嫌いがそっくりですね。
- ③ 僕そっくりの顔をしたネズミなんて居るわけないよ。
- ④ 困るじゃないか。君の小説は僕が前に書いたのと筋がそっくりだ。
- ⑤ あの二人は顔がウリ二つだけど，赤の他人だそうだ。
- ⑥ この写真とそっくり同じスタイルに髪をカットして下さい。

- III. このへんの店はみな似たりよったりだ。
 どの提案もみな似たようなものだ。

(注) 「似たりよったりだ」も「似たようなものだ」も，あるまじりの中のどの一つをと
 ってみても他とあまり変らないことを，がっかりした気持で言うときの表現。

- ① この店に置いてあるシャツはみな似たりよったりで、いいはありませんね。
- ② どの意見も似たりよったりで、独創的なのはなかった。
- ③ この際、どんな手段をとっても結果は似たようなものさ。
- ④ どの本を見ても書いてあることは似たりよったりでした。
- ⑤ あの店では、どの料理を注文しても味は似たようなものでしょう。

IV.

この景色はまるで絵のようだ。
 あの人は仏様のような人です。
 田中さんは魚のように上手に泳ぎます。

- ① わあ、素晴らしい。まるで夢のようだわ。
- ② 有難い。盆と正月と一緒に来たようだ。
- ③ この御飯はやわらかくておかゆのようです。
- ④ 田村先生は私にとって親のような存在です。
- ⑤ 電車で、目の前にお年寄りが来たら、次の駅で降りるような顔をしてそっと立ちましよう。
- ⑥ 人間が鳥のように飛ぶためには、どれぐらい大きな翼がいるんだろう。
- ⑦ 熱があつてフラフラしているとき、まるで雲の上を歩いているような感じがします。
- ⑧ 人間は、からだに栄養が必要のように、心にも栄養がいるのです。

V.

あの子の走り方はアヒルみたいだ。
 彼はいつも夢みたいなことばかり言っています。
 丸山さんの顔はお月様みたいに丸い。

(例) 「みたいだ」は「ようだ」より口語的な、くだけた言い方。

- ① この肉はかたくてゴムみたいだ。
- ② あなたの食べ方は姿勢も音も犬みたいだ。
- ③ すごい雨ですね。シャワーをあびてるみたいだ。
- ④ どうしたんですか。ゆうれいにあつたみたいな顔して。
- ⑤ そんな夢みたいな事ばかり言っていないで、早く仕事を始めなさい。
- ⑥ 兄は私の合格を自分の事みたいに喜んでくれました。
- ⑦ クラス会では皆、子供にかえつたみたいにワイワイおしゃべりしました。